

氏 名 宮永 一美

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大乙第 255 号

学位授与の日付 平成 30 年 3 月 23 日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 越前朝倉文化の研究

論文審査委員 主 査 教授 落合 博志
教授 神作 研一
教授 小林 健二
名誉教授 橋本 政宣 東京大学
教授 福原 敏男 武蔵大学 人文学部

論文の要旨

Summary (Abstract) of doctoral thesis contents

本論では、朝倉氏の文化受容と展開を捉える対象として、猿楽・幸若舞・祭礼芸能・室礼・養鷹・神道伝授・文芸交流等を考察の課題に設定した。いずれも先行研究においては朝倉氏の文化受容を代表するものとして取り上げられておらず、朝倉氏の新たな文化的特徴が提示できると考えた。また越前の地理的条件や風土によって育まれていた文化的環境が、朝倉氏の文化受容によって変化する過程を明らかにすることで、戦国大名に共通してみられる文化受容の特徴とは異なる点を見出すことが可能と考えた。

第一章では、越前猿楽の活動の変化をたどることで、朝倉氏の文化受容がもたらした影響、『朝倉孝景条々』に示された芸能者育成の目的について考察し、越前猿楽が、朝倉氏という強力な外護者を得て、その下で朝倉氏の芸能志向に応じながら活動を変化させることで、不安定な戦国時代を生き抜いたことを示した。また、朝倉氏滅亡後、越前猿楽の活動がみられなくなることについては、本来の活動の場であった祭礼芸能の場が失われたことと、朝倉氏と同じ芸能志向を持った新たな外護者を得られなかったことをその原因として示した。

第二章では、幸若舞について朝倉氏との関わりを通して活動を捉え、越前猿楽との違いをみていくことで、朝倉氏の芸能保護の目的を明確にすることを試みた。その結果、幸若舞は越前猿楽とは異なり、応仁の乱以後も上洛興行を続け、また朝倉氏の主催する宴や芸能の場には出演していなかったことを明らかにした。このことから、朝倉氏の芸能者育成には、京都から摂取した文化・知識・技術を、領国内の人材を活かして発展普及させていく目的があったことを示し、越前猿楽は武家儀礼の場で演能に出演するお抱え役者としての役割を得たが、武家儀礼の場には出演することのなかった幸若舞は、都人を魅了する芸能ではあるものの、朝倉氏が求める芸能ではなかったことを示した。

第三章では、越前池田庄の祭礼芸能の変遷について考察し、中世池田の祭礼芸能には、朝倉氏と姻戚関係にあった鞍谷氏や池田氏などが、御供の寄進や神田を安堵することでその継続に関与していたことを明らかにした。また、このような経済的基盤が近世に入ると崩れ、芸能費用・出演者ともに村人の負担となり、村の規模と経済状態がそのまま芸能存続を左右し、衰微・断絶に至る要因となったことを示した。

第四章では、朝倉氏と一族や家臣が相伝した『君台観左右帳記』と越前で相伝された立花伝書について伝授された経緯を詳らかにした。具体例として取り上げた朝倉家臣の服部暹榮は、村田宗珠から『君台観左右帳記』の伝授を受け、その知識を観世座太鼓方の観世国広に相伝していた。また息子の服部兵部丞は足利義昭の朝倉館御成で座敷飾りを担当する座敷奉行を務め、太鼓方としても出演していたことから、芸能を習得した者が、次には教える者となって朝倉治政下の芸能普及を担っていたことを具体例から示した。また、立花についても越前で伝授された立花伝書が複数伝存することから、立花の知識が越前で普及していたことを明らかにした。

第五章では、鷹狩・養鷹に関する知識・技術の伝授について考察し、朝倉一族の武将宗滴が、庭で飼育する鷹に卵を産ませ孵化させるという養鷹法に成功し、越前で独自の鷹狩・養鷹技術普及の実態がみられたことを紹介した。この他にも越前に養鷹術を学ぶ者がい

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

たことを、朝倉家伝来の鷹書「唐流鷹秘訣條々」や、越前西谷の外山余次郎が相伝された鷹書、斯波氏子息の含蔵寺殿が求めた『鷹百首註』などの鷹書から示し、朝倉家中において養鷹術が普及していたことを明らかにした。

第六章からは、特定の芸能に視点をおいて受容と展開を捉えるのではなく、一乗谷の文化興隆に多大な影響を与えた人物に焦点を当てて考察を進めた。第六章では、京都吉田家と朝倉氏の交流について考察し、その交流の背景にあった、吉田社領鳥羽庄の神用納入をめぐる交渉について着目し、神道伝授の経過を詳らかにした。吉田家が神道知識を強みとして鳥羽庄神用の交渉を有利に進めるために神道伝授を行っていた可能性を指摘し、伝授を受けた朝倉右馬助や朝倉与三・朝倉宇兵衛らが、鳥羽庄の神用納入に影響力を持つ武将であったことから、神道伝授が鳥羽庄の交渉と密接に関係していたことを示唆した。また、吉田家の交流が長く続いた背景として、一乗谷の阿波賀春日社神主ト部氏の存在があったことを明らかにした。そして両者の親交が、朝倉氏滅亡後、近世に至り春日神社再興の起因となっていくことを示した。

続く第七章は、五山僧月舟寿桂の文集『幻雲文集』から、これまでは取り上げられることのなかった越前の芸能者・職人・医者・数寄人等との交流について考察した。文集に収載される 316 作品の内、越前に関係する 116 作品を一覧にまとめ、月舟が貴賤聖俗を隔てず越前の人々と交遊した様子を読み取り検討を加えた。そして、月舟が書いた肖像画賛から、西山光照寺跡で見つかった石塔が朝倉一族の武将朝倉景連〔戒名・越中太守昌林紹繁居士〕の供養塔であることを明らかにした他、石友斎や藤原有宗など、他史料には経歴や活動が現れない越前文化圏の末端にいた風流人の足跡を詳らかにした。さらに、月舟の交流がどのような場で育まれたのかについても検討を加え、曹洞宗宏智派との親交や、一乗谷の寺院が持っていた機能から「含蔵寺」を想定した。この寺院が一乗谷で最も繁華な阿波賀にあり、重要な客人を接待する迎賓館の役割も持つ公界所であったことから、月舟を囲む文芸の場に相応しい寺院であったことを示した。

最後の第八章では、本論を総括する課題として、朝倉滅亡後、越前の人々の中に、朝倉文化興隆の歴史がその繁栄を偲び憧憬する記憶・印象となって再生し、多様な形で現れたことによって「遺跡一乗谷」の創出につながったと考え、その軌跡を読み取ろうと試みた。『赤淵大明神縁起』・『瀧殿権現縁起』の二つの縁起から、朝倉氏の歴史認識や歴史像がどのように作られ、また、変化していったのかを考察した。結果、赤淵大明神を氏神とする信仰は、朝倉氏の治政が最も安定し文化的にも最盛期を迎えた四代孝景の時代に高揚したことを明らかにし、その背景には京都吉田家との交流があったことを示した。対して、滅亡後、百年余りたって著された『瀧殿権現縁起』からは、義景の霊が瀧殿権現として祀られることになった経緯と背景について考察した。春日神社の再興は、越前藩主松平吉品が阿波賀春日社の由緒を伝える吉田日向守と出会ったことをきっかけとし、『瀧殿権現縁起』が作成され義景の神格化がなされたが、この時、瀧殿権現を鎮魂し崇敬することが、越前国主の継承に関わる重要な行為であると意義付けられたのには、朝倉文化興隆と城下町の悲劇的な滅亡の歴史が大きく影響したと考えられ、朝倉氏が全く意図しない形で、瀧殿権現という新しい神の誕生へと結び付いたことを示した。そして、滅亡後に一乗谷に建てられた春日神社や義景墓所・菩提寺松雲院などが、朝倉氏盛衰の歴史が繰り返し語り継がれ供養が重ねられた証であることを示し、城下町の跡が朝倉氏鎮魂の聖地として再生さ

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

れ、遺跡一乗谷の中に表象化されていることを示した。

博士論文審査結果の要旨

Summary of the results of the doctoral thesis screening

申請者宮永一美氏は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館に長年にわたり勤務する傍ら、15世紀末から16世紀末にかけて、一乗谷を拠点として越前一带に勢力を張った朝倉氏の文化についての研究を重ねてきた。本論文「越前朝倉文化の研究」は、その主要な成果をまとめたもので、序章と終章を別とし、「第一章 朝倉氏による芸能保護と越前猿楽」「第二章 朝倉氏の芸能志向と幸若舞」「第三章 祭礼芸能の場と担い手—志津原白山神社の能装束にみる芸能の継承と断絶—」「第四章 朝倉氏と室礼・立花の芸能伝授」「第五章 戦国武将の養鷹と鷹書の伝授」「第六章 朝倉氏の神道受容と吉田兼右—阿波賀春日社をめぐる—」「第七章 越前における文芸交流と月舟寿桂」「第八章 朝倉氏の歴史顕彰と一乗谷鎮魂」の、全8章から構成されている。

越前朝倉氏の文化についてのまとまった先行研究には、その文芸方面に着目したものとして、米原正義氏の「越前朝倉氏の文芸」（『戦国武士と文芸の研究』昭和51年所収）がある。米原氏は、朝倉氏の文化事績を文芸資料と古記録に基づいて考証し、中央と越前の文化交流を、下向者側の経済的事情に起因するものと、朝倉氏の招請という文化受容者側に起因するものとに分けて考察した。申請者宮永氏は、戦国武将の文化受容を文化史研究に留めず政治史上での位置づけを図った米原論を意義深いものと評価する一方で、朝倉氏は文化に溺れて滅亡したというステレオタイプの歴史像を作り上げてしまったきらいがあると指摘し、新たな越前朝倉氏の文化史を、地域に根ざした視点で考察する必要性を唱える。そのため、米原氏が取り上げた中央からの文化受容を代表する和歌・連歌・儒学などの文学や学問ではなく、従来の研究で対象とされてこなかった猿楽・幸若舞・祭礼芸能など地域と関係が深い芸能から、立花・鷹などの諸芸能、さらに神社縁起にいたるまで目配りし、包括的に朝倉氏の文化受容とその展開の様相を捉えようとする。研究対象を広げたことに加え、文化の受容のみでなくその後の変化発展をも視野に入れている点に、本論文の着眼の新鮮さと学術的意義があると言えよう。

前半の第一～五章は、朝倉氏の芸能受容についての諸論であり、越前猿楽・幸若舞・立花・鷹などを広く取り上げ、それらの知識・技術の摂取と普及に関わった人々や背景に焦点を当て、芸能文化の受容とその展開を具体的に究明している。同じ越前の地に生まれながら、朝倉氏の庇護の有無という点で対照的な越前猿楽と幸若舞を対比して、後者は武家儀礼の中に取り込まれなかったために朝倉氏の保護育成の対象にならなかったとする結論は、朝倉氏と芸能の一樣でない関係を示したものとして着目される。また立花・鷹に関する伝授については豊富な資料を駆使して、多くの新見を含む手堅い考証がなされ、朝倉氏の文化受容と継承発展の一面を描き出すことに成功している。後半の第六～八章では、吉田家からの神道受容の様相と江戸時代におけるその残響、越前をたびたび訪れた五山僧月舟寿桂の『幻雲文集』の分析を通じた中央との文化交流のネットワーク、朝倉氏の最盛期に制作された氏神・赤淵大明神の縁起及び滅亡120年後に最後の当主朝倉義景を祀るため創建された瀧殿権現の縁起の背景、等を考究しており、従来の研究に欠落していた対象について新たな視角から論じている点に意義が認められるとともに、宮永氏の広い視野がうかがわれる論考ともなっている。

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

総じて、本論文は宮永氏が長く携わってきた一乗谷を中心とする実地調査の成果を十分に活かしたものであり、文献資料とフィールドワークで得られた資料とを合わせて考察を行い、朝倉氏時代の具体的な文化状況を捉えたところに特徴が現れている。米原氏とは異なった方法で構築された、地域に根ざした文化史研究であると言えよう。宮永氏の視点はあくまでも朝倉氏（地方）の側に寄り添って、越前という風土の中で朝倉氏が行った文化施策のあり方やその後の展開の種々相を、ダイナミックに捕捉しようと試みているところに大きな特色が認められる。

ただし、本論文に全く問題がないわけではない。細かい点では、例えば第一章で引用されている田中郷惣社天王社の嘉慶元年（1387）の年紀を持つ「天王社御幸供奉日記写」は、宮永氏も書写年代に疑念を示しているが、内容的にも嘉慶年間のものとしては問題があり、引用には非常な慎重さが求められる。また第三章で、幸若舞の祖と伝える桃井直詮（あるいは安直）を描いたとされる像（伝土佐光信筆、東京国立博物館蔵）について、宮永氏は画像と越前幸若家の由緒書との符合から信憑する方向で考えているようであるが、その位置付けについて従来から諸説があるもので、さらに踏み込んだ検討を望みたいところである。また大きな観点でも、テーマを朝倉氏の文化に絞っているため、戦国期の大名文化全体の中での朝倉文化の位置付けが不十分という問題は残る。

しかし、それらの問題点は今後の宮永氏の研究の中で解決されることが期待され、論文全体としては、先行研究の欠を補いつつ朝倉文化の新たな研究水準を示した点で、博士の学位にふさわしい成果と評価できる。

以上により、審査委員会は、宮永氏に博士（文学）の学位を授与することについて、全員の意見の一致をみた。